

青
少
年
く
ら
し
き

家庭版

発行
倉敷市教育委員会
編集
生涯学習課
☎ 426-3845

8月



「子どもを育てる」―私が大切にしていること―

今回は倉敷科学センター主任科学指導員 倉敷市立自然史博物館友の会会長の吉岡勉先生にお話を伺いました。先生は長年小学校の教壇に立たれ、最後は天城小学校の校長先生として勤務されました。子どもの頃から理科が大好きで、生物、自然科学、物理などとあらゆる分野において興味を持ち、一つの事に夢中になると、時を忘れるくらい没頭する少年のような人柄です。

私は、小学校の教職に携わり、三年前に退職しました。教職中に出会った子どもや保護者、同僚などから学び、自分なりに積み上げてきた「子育て論」について簡単にお伝えします。また、私は長年、自然の動植物に触れ



自然史博物館のエントランスにある「ナウママとパオ」

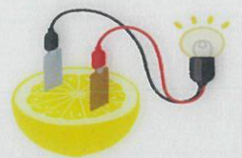
合っていましたので、自然との対話の楽しさについても触れてみます。以下、「指導者」とは、教師や保護者を意味しています。

指導者が学び続ける

子育てで大切なこと、一つ目は、日々学び続ける指導者であることです。教えているときは、目の前の子どもが少しでもできるように欲している、分かるようになって欲しいという気持ちでいっぱいになります。しかし、なかなかうまくいきません。自分に感情が入るほど、子どもはついてこなくなってしまう。これは、子どもに何かを「させよう」としているからです。つまり、知識や技能の面だけ伸ばそう



としていのです。「させる」のではなく、子どもが何かを「できるようになる」ことが大切で



です。「できるようになる」とは、習得した知識を活用したり、身につけた思考を發揮したりしながら、知識を相互に関連付けてより深く理解できるようにすることです。そのためには、子どもが学ぶ学習内容の系統性や子どもの発達段階などについて、指導者が詳しく理解していることが大切です。指導者自らが学び、日々伸びていることが求められます。

プラス面で子どもを見る

二つ目は、その子の伸びる方向を見つめることです。何に興味を示し、何ができそうなかを見抜き、ほめながら少しずつ取り組ませていきます。その時、大切なのは、「○○できる」の対を「○○できない」としないことです。例えば、「落ち着いて行動できる子」の対を、「落ち着きがない子」とするのではなく、「活動的な子」と見ます。「論理的に行動できる子」の対は、「あまり考えずにすぐ行動する子」

ではなく、「直感的に行動できる子」と見ます。「謙虚」の対は、「大胆」、「素早い」の対は、「慎重に」など、いろいろ考えられます。とかく子どもを前にすると、「何でできないの」と思ってしまうがちですが、これは、子どもをマイナス面で見ていてからです。子どもをマイナス面で見るのではなく、プラス面で見ることで、子どもの伸びる方向が見えてきます。

非認知能力を育てる

三つ目は、非認知能力を育てることです。



「ミナモ」 水彩画

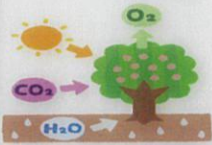
倉敷市立倉敷第一中学校3年 中川 美乃莉 (令和2年度)

動きがある様子を表現したかったので、尾ひれを細かい筆で重ねて描きました。また、濃淡がグラデーションになるよう工夫しました。

非認知能力とは、認知能力テストで数値化できるものとは別に、①目標を達成するための忍耐力、自己抑制、目標への情熱 ②他者と協力するための社会性、敬意、思いやり ③情動を抑制するための自尊心、樂觀性、自信など、認知能力以外のものをテストでは数値化できないものを広く指します。学習を進めるためには、内容を理解する、既習事項を活用するなどの認知能力が必要ですが、しかし、それだけでは十分ではありません。理解できるまで根気強く勉強を続けたり、友だちと教え合ったり理解を深めたりといった非認知能力の支えが必要です。学年が上がり、努力や工夫が多く求められるようになるにつれ、非認知能力の支えがなければ主体的に学び続けることが難しくなってきました。また、非認知能力は学力だけに結び付くのではなく、生涯にわたって自分を成長させたり、豊かな人間関係を築いたりなど、人の営みの支えとなります。

自然との対話の楽しみ

さて、ここからは自然との対話について述べたいと思います。私は、自



然の動植物に魅せられて
いる者です。学生時代から植物に興味をもっていました。今では、野鳥や昆虫にも手を広げています。休日には、仲間や子どもたちと自然の中に出かけ、動植物の観察など、自然の中での活動に取り組んでいます。自然の中に入ると、大人も子どもも時間を忘れて活動に没頭します。それは、自然の動植物が多様で、四季により絶えず変化しているからです。「違った所を見つけよう、違った種類を見つけよう、季節を変えて見てみよう」など、自然の魅力に惹かれて、知らず知らずのうちに、自分の知識や技能を広げたり深めたりしています。発達段階が進むと「これなら、あそこなら、この季節なら」など仮説を立てて活動するようになります。これは、理科教育で培う「問題解決の能力」が発揮されている姿です。

自然体験は非認知能力を育てる

自然体験は、子どもにとって非認知能力を育てる大切な活動の一つです。人が自然に対して働きかけることは、



古来より普遍的なもので、そこに共通するのが、「原体験」です。原体験とは、五感による人間としての原始的な体験を指します。この原体験の積み重ねにより、人は感性を豊かにし、自然の認識を深めていきます。しかし、昨今の子どもは、自然とは離れた生活をしていきます。原体験として自然とかわる機会が減っています。そんな子どもを自然の中に連れて行っただけでは、活動が深まりません。そこには活動の工夫として、次の三点が必要になってきます。

まず、どんな時期に、どんな場所で、どんな動植物に触れ合わせるのかということです。色や形が特徴的であったり変化したりするもの、動きが特徴的なものなど、子どもが興味・関心をもちやすいことが大切です。

次に、どんな人と一緒に活動するかということ。同年なのか、異学年なのか、それとも異世代なのか、それぞれ目的は違いますが、人と一緒に活動すれば、活動内容が深まるだけでなく、人の良い面に気づく、集団の中の身の処し方を学ぶなど、多くの良い効果が期待できます。

そして、活動後に自分を振り返る時

間を取ることで、「どうだった?」「何が楽しかった?」など、簡単な質問をすることで、子どもは自分の活動を自分で価値づけられます。「またやりたい」「不思議だ」「自分でできた」などの言葉が出てくればしめたものです。最後に、倉敷市には、倉敷市立自然史博物館と倉敷科学センターがあります。自然史博物館では、自然史博物館友の会と共に野外での観察会を年間三十回ほど行っています。植物、昆虫、野鳥、地学など、それぞれの専門家に教わることもできます。科学センターでは、天体観望会や科学講座などを開いています。また、プラネタリウムでは、最新鋭の投影機が美しく忠実な星空を映し出しています。

倉敷市は、自然との対話を楽しもうと思えば恵まれた環境にあります。子どもたちと一緒に自然との対話を楽しみましょう。(おわり)



科学センターにある最新鋭プラネタリウム投影機 ケイロン3

令和3年度から「いきいきパスポート」の提示で7~8月平日も掲載施設が無料になります。自然史博物館・科学センターでも利用できます。詳細は→

